2023年6月25日 礼拝メッセージ

聖書:ルカの福音書19章11～27節
説教:不公平で残酷な神なのか?

はじめに

26節の「だれでも持っている者はさらに与えられ、持っていない者からは、持っているものまでも取り上げられるのだ」、このみことばを初めて読んだとき、大変戸惑ったことを今でも覚えています。おそらく皆さんもそうだと思います。お金持ちはますますお金持ちになり、貧乏人はますます貧乏になる。もし本当にそんなことが言われているのだとするなら、こんなひどい不公平な話しはありません。いったいどういうことだろう。そんな疑問が湧いてきます。

そればかりではありません。27節の「私の目の前で打ち殺せ」というところもひどく残酷な表現で、とても子どもたちに読んで聞かせられるような箇所ではない。これが本当に私たちの神の姿なのか。納得できない思いに駆られます。一体イエスはどのような意味でこのようなことを語ったのか。ともに考えてまいります。

1　たとえ話

1）イスラエルの解放を待ち望む人々

今日の話の発端は次のようなものであったと書かれています。11節。「人々がこれらのことばに耳を傾けていたとき、イエスは続けて一つのたとえを話された。イエスがエルサレムの近くに来ていて、人々が神の国がすぐに現れると思っていたからである。」

イエスがエルサレムの近くに来たことと、人々が神の国がすぐに現れると思い込むようになったがどうして結びつくのか。これには説明が必要でしょう。先週のザアカイのところでも触れたことですが、イスラエルはローマ帝国の支配され、税金は徴収されるし、ローマ兵があちらこちらに駐屯し、好き勝手に振る舞っています。アブラハムを通して与えられた約束の地であるイスラエルが、こんな有様になっていることを喜ぶ人はだれもいません。いつか救い主が現れてイスラエルを救い、ローマ帝国から解放してくださるのではないか。そのようなメシア待望論が民衆の中にずっとあった。そこへイエスが現れ、数々の奇跡を行い、「神の国があなたがたの近くに来ている」と語った。それで人々は考えた。今イエスがエルサレムに向かっているけれど、これはローマ帝国を追い出すための最後の戦いをするために違いない。期待がどんどんふくらんでいくときに、イエスはこのたとえ話を語った。そのような背景でありました。

2）三人のしもべ

そのたとえ話はこんな内容です。主人は三人のしもべにそれぞれに一ミナのお金をゆだねて、王になるために旅に出ます。しばらく経ってから帰って来た主人はしもべを呼び出し、報告させる。最初のしもべは一ミナを十倍にしました。そうすると主人はこう言う。17節。「よくやった。良いしもべだ。おまえはほんの小さなことにも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。」二人目のしもべが五ミナをもうけたと報告すると、主人は「おまえも五つの町を治めなさい」と言う。ところが三人目のしもべは、預かっていたお金をふろしきに包んでしまっていたと報告すると、主人はカンカンに怒って「その一ミナを取り上げて、十ミナ持っている者に与えなさい」と言った。

3）持っていない者はさらに取り上げられる

そんな内容ですが、引っかかることがいくつかあります。一つ目。神は、商売をしてお金をもうけする人、つまりビジネスをする人こそが信仰深いと言っているのか。でも一方では「天に宝を蓄えなさい」というみことばもあります。これをどう理解するか。

二つ目。三人目のしもべは、他の二人のように儲けたわけではないけれど、預けられたお金を使い込んだわけでもない。ちゃんとそのまま主人に返そうとした。これのどこがいけないのか。そんな疑問を抱えて立ち止まっていると、とどめを刺すようなことばが続きます。26節。「おまえたちに言うが、だれでも持っている者はさらに与えられ、持っていない者からは、持っている物までも取り上げられるのだ。」

神が義なる方であるというのなら、公平であるべきではないのか。これではまるであべこべです。イエスは、あの金持ちの指導者に語っていたではなかったか。「あなたがた持っているものをすべて売り払い、貧しい人たちに分けてやりなさい。」今日の箇所と比べると、とても同じ方が語ったとは思えません。いったいどう考えたらよいのでしょう。

４）目の前で打ち殺せ

疑問はそれに留まりません。このたとえ話はちょっと入り組んでいて、単なる三人のしもべの話しでではなく、14節がある。「一方、その国の人々は彼を憎んでいたので、彼の後に使者を送り、『この人が私たちの王になるのを、私たちは望んでいません』と伝えた。」その結末が27節。「またさらに、私が王になるのを望まなかったあの敵どもは、ここに連れて来て、私の目の前で打ち殺せ。』」

神の真理をわかりやすく解き明かすためにイエスはたとえ話を語ってくれたはずなのに、よく見ると話しが思った以上に複雑でわかりにくい。いずれにしても、厳しい話しで締めくくられるので、聞いている者には非常に後味が悪く、心が沈んでしまいます。

２　何が取り上げられたのか

私たちは何かを見るときに、一番注意を引きつけられるものに目が行くという性質があります。そこばかりを見てしまうので、大事なことを見落として判断を誤ることがある。ここを読むときもそうです。真っ先に目が行くのは、さきほど挙げたように二つあって、一つは、持っている者がさらに与えられ、持っていない者は、さらに取り上げられる。これはおかしいと思っています。二つ目は、私の目の前で打ち殺せ。これは残酷だ。私たちの目がそこに釘付けになり、本当のことが見えていなかった。

では実際どうだったのか。三人目のしもべは何を取り上げられましたか。よく読んでください。24節にあります。「一ミナをこの者から取り上げ」とある。その一ミナは最初からこのしもべが持っていたものでしょうか。そうではない。主人から預かったお金です。ということは、このしもべは自分が最初から持っていたものまで取り上げられたわけではない。ところが、いつの間にか全部取り上げられたかのように思い込み、神はひどい方と思っていませんでしたか。そこにばかり目が留まり、もっと考えなければならないことが抜け落ちていた。それは何か。「王になるのを望まなかった人たち」の話し。

３　神の姿と人間の姿

１）王となることを望まなかったのはだれか

そこで「王になるのを望まなかった人たち」こことに焦点を当てることになるのですが、問題はこれはいったいだれのことを指していたのか、です。このたとえ話だどんなタイミングで話されたか。最初に申しました。イエスがエルサレムに近づくにしたがい、この方が神の国を打ち立ててくださるに違いないと思い込んでいった。それがことが発端でした。そんなイエスに対する期待が最高潮に達したのは、イエスが小さなろばの背中に乗ってエルサレムに入ろうとしたとき。人々は道に自分の上着を敷き、「祝福あれ、主の御名によって来られる方、王に」と叫び、大喜びでイエスを迎えます。人々はイエスが王となることをこころから望んでいたはずでした。

２）イエスを憎む人々

でも、あのときイエスを歓喜して迎えた群衆はどうなったか。私たちは知っています。イエスが裁判にかけられたとき、ピラトは「むちで懲らしめた上で釈放」しようとします。ところが人々は一斉に叫ぶ。「その男を殺せ。バラバを釈放しろ。」「十字架だ。(イエスを）十字架につけろ」と叫ぶ。いったいだれが叫んだのですか。祭司長やパリサイ派の律法学者たちに扇動された人々です。たった何日か前に、イエスがエルサレムに入られるとき、大喜びして迎えた人たちが、いま「イエスを十字架につけろ」と叫びます。イエスを地上の王と期待しながら、やがて手のひらを返すようにして十字架に追いやっていった人々。イエスのことばを聞いていた人々がそうしていく。

３）人の罪の残酷さ

では27節はどうなるのでしょう。「神は残酷だ。」そう思っていました。でも残酷なのいったいどっちなのか。神のひとり子を十字架につけて殺せ、と叫ぶ。それでも私たちは優しくて思いやりがあると言えるのか。人間の方がよほど厳しくて残酷だった。そんな自分の本当の姿は見ないで、神は厳しいと一方的に批判する。これが人の罪の現実なのです。

４）わざわいを思い直される神

では神はどのような方なのでしょう。21節に書いてある。「あなた様は預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取られる厳しい方ですから、怖かったのです。」そう言ったために一ミナ取り上げられた。ということは、神の本当のご性質はなにか。21節をそのままひっくり返せばよい。「神は、預けなかったものは取り立てない。蒔かなかったものは刈り取らない。」いやこんな後ろ向きな表現では間に合いません。預言者

ヨナはこう言っていた。「あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのに遅く、恵み豊かで、わざわいを思い直される方であることを知っていたからです。」(ヨナ4章2節）これが神のご性質です。

では27節はどうなるのでしょう。人々は手のひらを返すようにして、イエスが王となることを望まずに十字架に追いやりました。神の敵となったのですから、殺されても言い訳はできません。でも、もし本当に神が怒るのに遅い方というのならば、私の目の前で殺せなどと言うはずはない。そう思いませんか。そのとおりです。では27節はどう理解したらよいのか。

イエスを十字架につけろと叫んだ人々がその後どうなったかを見れば良い。彼らはさばかれましたか。いいえ、さばかれません。弟子たちは十字架から逃げて隠れてしまいました。ペテロはイエスを三度否定しました。弟子たちもイエスが地上の王となることを望みを託し、その暁には大臣になるのだと勝手な夢を描いていた。そんな弟子たちをイエスはさばき、殺したか。いいえ、絶対にそんなことはならなかった。では27節はただの脅かしだったのか。それも違う。「ここに連れてきて、私の目の前で打ち殺せ。」残酷に聞こえたこのことばでした。では、実際に殺されたのはだれですか。主はわざわいを思い直されて、私たちを罰するのではなく、ご自身が罰を引き受けられる。イエスが十字架でいのちをお捨てになりました。これはイエスご自身のことです。

たとえ私たちが罪を犯したとしても、たとえ神が分からず悪口雑言を吐いたとしても、神は赦されます。どのようにして赦すか。私たちがかかるべき十字架をこの方が背負われる。あの十字架につるされている方こそ、神のひとり子であり、私たちの救い主であると告白する者を一人残らず救おうとされます。

神にとってだれが持っている者であるのか，神にとってだれが持たない者であるのか。お金の話をしていたのではありません。神を信じる者に神は豊かな恵みを与えようと待っておられるます。この救いの手をつかみなさい。主は十字架から語りかけて下さっています。